九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平曲譜本と付属語のアクセント

奥村，三雄
九州大学文学部教授

https://doi.org/10.15017/12132

出版情報：語文研究. 39/40, pp.88-101, 1975-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

平曲譜本と付属語のアクセント

奥村三雄

一　平曲譜本と付属語アクセント

平曲の旋律とアクセントとの関係については、「前田流平曲メロディについて」（『日本文学研究』31）・「平曲の音声（上・下）」（『日本音声学会会報』99・101）・『四座講式の研究』（昭39三省堂）・『国語アクセントの史的研究』（昭49塙書房）等々、金田一春彦氏の考察があるし、又、『国語と国文学』49巻10号や『文学研究』69集・72集等の拙稿も、数種の譜本類を中心にこの問題を究めようとしたものである。しかし、当面の課題たる付属語のアクセントについては、尚未詳の点が多かった。

もともと顕在的なアクセントは、一般に単語よりも文節を単位とすべきもの。付属語アクセントに関しては、付属語それ自体の型もさる事ながら、自立語アクセントとの接続関係が特に複雑なのである。

かって私は、かかる観点からして、現代京都語の付属語アクセントを、東京語のそれと比較しつつ考察した（『国語国文』25巻9号の拙稿その他）事がある。一方、金田一春彦氏（『四座講式の研究』）は、中世初期頃の付属語アクセントを明らかにされたのであるが、それは、現代語アクセントとは余りにもかけ離れたものであり、その歴史的変遷のあとを想定する事は難しい状態にあった。本稿では、平曲譜本資料にその仲介（ナカダチ）的な意義を認め、複雑なこの問題に関する研究の緒を見出だそうとする。

例えば、《現代京都語における低起式動詞取ル類は、接尾辞的な付属語スやレルの類が付く場合に限って、●●●（取ラス）・●●●●（取ラレル）の如き高起式をとる—c.f. 取ラヘン（○●○○）や取ラハル（○○○●）などは低起式》が、この現象も、《付属語ス・ルの類が平曲譜本において、動詞のL形（下記第六項）接続である》事により、はじめてその歴史的説明の緒をつかみ得る。つまり、取ラス・取ラルの類は、四座講式当時～平曲譜本当時の間に、○○◓→●○○の変化を遂げ、三拍動詞二類に準ずるものとなった。而して、三拍動詞二類は、平曲譜本当時以降、三拍動詞一類（渡ル類・重ヌ類）と合併してしまった為、取ラス・取ラレルの類はそれぞれ、渡ル類・重

ネル類に準じて高平調をとる様になったのである。

そう言えば、平曲譜本の類は、《質量ともに極めて豊富なアクセント資料であり、且、諸語形をいろんな話線的関係においてとらえ得る》という様な意味から言っても、この面の研究に最適の資料と見なされる。

（注）本稿のアクセント表示において、●・○・◓・◒はそれぞれ、高音拍・低音拍・下降調拍・上昇調拍を示す。又、「**高平調**」とは高く平らな型をいう。その他もこれに準ずる。

一一一　資料について

資料としての平曲譜本類や作業の方法手続き等に関しては、概ね前記拙稿の場合に準ずる。ついて参照されたい。

中心資料としては、東京教育大学蔵一方流譜本（略称「**教**」、前田・波多野両流分派以前の姿を示すといわれる。白声の曲節がなく、正節本等の白声は大てい口説になっている）をとり上げ、補助資料として、平家正節の尾崎家本（略称「**尾**」、原本と伝えられるもので、昭49年大学堂書店より影印刊行）や、東京大学本（略称「**東**」、岡正武写）、京都大学蔵波多野流本（略称「**波**」、徳川末期写）その他を採用した。

所で、これら譜本類の節ハカセはもともと音楽的な旋律を示すもの。アクセント資料として見れば当然、或限界があるはずである。この場合、《各譜本の表記がそれぞれ、アクセント資料としていかなる意味をもつか》という事は、各譜本資料からの帰納とか、他のアクセント資料との比較とか、いろんな作業によって究明される訳であるが、その辺につき詳しくは前記拙稿に譲る。さし当って、本稿の記述に関係ある部分だけを略記すると次の如くである。

正節本の白声（略称「**白**」）・口説（略称「**口**」）における「**上**」や「**コ**」（コ上を本稿ではコと略記する）は、無記号部分より高い音を示す。本稿では無記号部分を「×」で示した。

教育大学本の口説における「**上**」も右に準ずる。「**中**」は概ね右記の「コ」に準ずる（例えば、「上中」は●●型を示し、「上中上」は●●●型を示す。）が、ただ、「中上」・「中中上」の類はそれぞれ、○●型・○○●型を示す様である。

波多野流本における「／」及び「ー」はそれぞれ、教育大学本の「上」及び「中」に準ずる。

本稿では、白声・口説以外の曲節を殆んどとりあげないが、例えば、正節本における指声の「**上上中**」表記（●●○型）、強下ゲの「**中〜**」表記（●○型）、拾や上音の「**上コア**」表記（●●○型）、中音の「**┐／ろ**」表記（○●○型）、中ユリの「**／×**」表記（●●型）等々、詳細については『日本文学研究』31号金田一春彦氏論文や『文学研究』69集の拙稿等を参照されたい。

要するに平曲譜本類の譜記は、白声や口説の部分をはじめ、その他の諸曲節も含めて概ね、中世末期〜近世初期頃の京都アクセントに関する有意義な資料と見なされるのである。

また、本稿では参考の為、中古〜中世初期頃のアクセント資料として次の如きをとり上げたが、これらについても詳しい解説は不要だろう。

類聚名義抄諸本（例えば「**高5ウ**」・「**観僧下101**」とある

のはそれぞれ、高山寺本及び観智院本の頁数を示す）、倶舎論音義（略称「倶」、旧古梓堂文庫本で、鎌倉初期頃のアクセント資料）、日本書紀古写本（大阪毎日新聞社複製本「岩皇」・「前雄」はそれぞれ、岩崎家本皇極紀・前田家本雄略紀の略記である）、古今集寂恵本（古文学秘籍複製会本、「寂120」の如く略記するが、数字は国歌大観番号を示す）、古今訓点抄（古典保存会複製本、「抄30」の如く略記する。数字は国歌大観番号）、四座講式諸本（『四座講式の研究』による）

尚、これら参考文献でも、声調表記のない場合は「×」で示したが、×印の意味は平曲譜本のそれと異る。例えば「上×」表記は、平曲譜本の場合●○型を意味するが、参考文献では第二拍の高低が不明というわけである。

二　付属語のアクセント型分類

かくして私は、主要な付属語の中、平曲譜本類ではっきりした譜記例の存するものに関し、《自立語アクセントとの接続関係》及び、《付属語自体の型式》という二面から検討を加えてみた結果、下記（第三項及び第四項）の如く、助詞を一四類（体言接続語七類・用言接続語七）、助動詞を一九類（体言接続語一類・用言接続語一八類）に分ち得たわけである。これで付属語が網羅されたというのではない事勿論であるが。

二―一　付属語アクセント分類の問題点

纔ってここで、ごく巨視的な観点から付属語アクセントを考えると、一おう次の様な分類が可能となる。

（甲）高平調・上昇調の後で高く付く―（甲Ⅰ）下降調の後で高く付く―卓立式
　　　　　　　　　　　　（甲Ⅱ）〃　低く付く―従属式
（乙）〃　低く付く―低接式

例えば、下記第三項所掲教育大学本の口説における①類助詞の例「ものが‖中×°」（54）と、②類助詞の例「君も‖中中×°」（39）とは、共に○型表記であるが、前者は従属式であり後者は低接式と見なされる。而してその違いは、個々の例に関する○型と●型との区別よりも、重要な意味をもつと考える訳である。

この場合、従属式と低接式との区別を、従属式と卓立式との区別より重視したのは、つまり《実際問題として、前者の区別が概ね、はっきりした（或意味ではプラング的な）対立であるのに対し、後者はしばしば場面的な（或意味ではパロール的な）対立と見られる》からである。或いは、卓立型とすべきなのかもしれない。

尚この立場において、例えば用言接続の一拍助詞は、従属式（⑨類のテ）と、低接式（⑧類のナ・⑩類のバ・⑪類のデ）とに分たれるわけであるが、しかし、これはあくまで巨視的な分類である。少し掘り下げて見た場合、動詞の未然形（L）にのみ付くデと、已然形（I）にも付き得るバとでは、性格が異る事勿論である。即ち、動詞のL形は大てい高く終る故、それに低く付く語は積極的な低接式と見なされるが、I形はすべて低く終る故、それに低く付く語は従属式であるかもしれない。

（注）動詞活用形アクセントのA形～M形については下記第六項を参照の事。

三　助詞のアクセント―譜記例一覧

先ず助詞について考えようとするが、詳しい考察の手順はあとにし、とりあえずここで、具体的な譜記例により助詞アクセントの実相を示してみよう。

(イ) 体言接続（厳密には体言にも接続し得るという意味。以下同様）一拍助詞

① 格助詞ガ・デ・ト（共に「の」の意）・ニ・ヲや係助詞ハの類—従属式●型（つまり、高平調や上昇調のあとでは○型になる）。例外として、低接式（つまり、●型、下降調のあとでは○型になる）表記も若干あるが、これは、他の助詞に下接する場合や用言接続形などがめだつ様である。

(甲) ●型表記　妓王が＝上上上。（教66）　尼に＝中上上（教93）　怒りを＝上中上。（教129）　今は＝中上中。（教135）　今年は＝上上上。（教94）　踏むに＝上中上。（教34）　来るを＝××上。（尾5下338b白）

(乙) 従属式○型表記　ものが＝中××。（教54）　後生で＝中××。（教83）　秋に＝××中×。（教89）　扇を＝中中××。（教15）　事は＝中××。（教12）　聞きしが＝コ××××。（東4上138ロ）　浴びけるを＝中上中××。（教129）　申すは＝中中××。（教122）

(丙) 例外的な低接式○型表記　父を＝中上×。（教133）　それをは＝上上中×。（教121）　見しに＝中上×。（教89）　無きに＝中上×。（教133）

② 格助詞ト（引用）・ヘや係助詞（終助詞的用法もある）カ・ゾ・モの類—低接式○型。つまり、どんな語のあとでも低く付こうとする。例外として、他の語（普通は付属語）を下接させるような場合は、従属式●型が認められる。

(甲) ○型表記　今日と＝××中×。（教70）　これへ＝上上×。（教78）　舟へ＝××中×。（教19）　何か＝中上×。（教63）　へだてか＝上中××。（教34）　それぞ＝上中×。（教77）　君も＝中中×。（教39）　数にも＝中上中×。（教135）　言ふと＝上上×。（教5）　見んと＝××中×。（教63）　有るぞ＝××中×。（教75）

(乙) 例外的な従属式●型表記　何事ぞや＝××中上中×（教78）　いつぞや＝中上中×（教90）　ともかうも＝中上中××（教73）

③ 格助詞ノの類—もともと、①類助詞に準ずべきものであるが、例えば、《手ノ類（テ）（三拍語）の●○型、山ノ類（ヤマ）（二拍語）三類の●●○（or●●●）型、笠ノ類（カサ）（同四類）の○●○型、頭ノ類（アタマ）（三拍語四類）の●●●○（or●●●●）型》等々の点で①類助詞と異る。

(甲) ●型表記　身の＝上上。（教125）　筆の＝上上中（教90）　都の＝上上上中（教76）　権（ゴン）の＝中上中（教137）　以ての＝中中上中。（教125）　指貫（サシヌキ）の＝××上中上。（教22）

(乙) 従属式○型表記　北の＝中××。（教28）　常の＝××中×。（教103）　命の＝上×××。（教92）　后（キサイ）の＝××中××。（教35）

(丙) 特殊型の例　田の＝上×。（東1下94ロ）　木（コ）の＝上×。（東1上22ロ）　家の＝上中×。（教20）　雲の＝上上×。（教3）　父の＝中上×。（教39）　今日の＝×中×。（教66）　女の＝上上中×。（教89）　思ひの＝上上上中（教34）

(ロ) 体言接続二拍（以上）（の）助詞

④ 係助詞コソや副助詞ダニ・ノミの類—●○型。下降調のあとでは大てい従属式○○型をとるが、卓立式●○型の表記も

存する。コソには卓立式の例がめだつ様である。

(甲) 従属式●○型表記　数のみ＝×上ㇷ゚×　えこそ＝上ㇷ゚×（教6）　なるにこそ＝××上ㇷ゚×（東1上48ロ）　召しおかれんだに＝××××中上ㇷ゚×（教69）

(乙) 従属式○○型表記　一類のみ＝上上××××（教33）　憂(ウ)うこそ＝中××××（教69）　そむくだに＝コ××××　納(ナ)受こそ＝上上××上ㇷ゚×（東1上21ロ「ここ」の誹記上は見せ消ち）　あらばこそ＝××上××上ㇷ゚×（東1上118白）　祈られけるこそ＝上上××××コ×（東4下77シオリロ）

(丙) 卓立式●○型表記　⑤ 格助詞ヨリや副助詞マデの類―低接式○○型。

国より＝上上××（教14）　何より＝中上××（教93）　草木(クサキ)まで＝上上中××（教49）　至るまで＝上上中××（教33）　事より＝中××××（教101）　三度まで＝中上××××（教70）

⑥ 副助詞バカリの類―●●○型。　前記④類の場合に準じ卓立式の例が或程度存する。

(甲) 従属式●●○型表記　五町ばかり＝上上上上ㇷ゚中（東1上62指）

(乙) 従属式○○○型表記　いかばかり＝上××××（教89）

(丙) 卓立式●●○型表記　尼前(アマゼ)ばかり＝××上××上ㇷ゚×（東5上97ロ）・御対面ばかり＝上中上中××上ㇷ゚中×（教65）　余るばかり＝中××上ㇷ゚中×（教96）

⑦ 副助詞ナンドの類―○●○型。前記⑥類の場合と異り、従属式は常に○○○型をとる。

(甲) 従属式○○○型表記　妓徳なんど＝上上中××××（教62）　儀式なんど＝上中××××（教40）

(乙) 卓立式○●○表記　師高(カタカゴ)なんど＝上上中××中×（教135）　恪勤(カクゴンシャ)者なんど＝上上中××中×（教126）　洗はせなんど＝上上コ××コ×（東5上7ロ）

(丙) 用言接続（用言にのみ続くという意味。以下同様）一拍助詞

⑧ 終助詞ナ（禁止）の類―終止形（A）に付き低接式○型をとる。

為(ス)な＝中～（尾4上231C強下ゲ）

⑨ 接続助詞テの類―連用形（E）に付き、従属式●型をとる。下降調のあとで○型になるのは勿論として、また二拍二類動詞に付く場合は例外的に、●型と○型との両者が認められる。

(甲) ●型表記　率(ヒキ)て＝上中（教24）　見て＝上上（尾1上51C白）　さて＝××中（教53）

(乙) ○型表記　越えて＝中××（教124）　続いて＝上中××（教34）　削って＝上上中×（教11）　参って＝××中中×（教73）

(丙) 二拍二類動詞に付いた例　生きて＝××中（教82）　召して＝××上（尾1上40b白）　もって＝中中上（教55）　付いて＝中上中（教6）　出でて＝××上×（尾3上177a白）　過ぎて＝××コ×（尾5下366b口）　組んで＝××上×（東6下10白）

⑩ 接続助詞バの類―已然形（I）及び未然形（K）に付いて、低接式○型をとる。

(甲) 已然形接続　あれば＝××中×（教53）　参らねば＝××中上中×（教76）　思へば＝中××××（教89）

(乙)　未然形接続　死なば＝上コ×°（尾4上229ａ口）　候らはば＝上中上中×°（教79）　例へば＝中××××°（教59）

⑪　接続助詞デの類――未然形（K）に付いて、低接式〇型をとる。

足らで＝上中×°（教96）　あはで＝中上×°（教89）

(二)　用言接続二拍（以上の）助詞

⑫　接続助詞トモの類―終止形（A）に付いて、低接式〇〇型をとる。

悔ゆとも＝××コ×°×°（東5上27ロ）　召さずとも＝××中××°×°（教81）

⑬　接続助詞ツツの類―連用形（E）に付いて、低接式〇〇型になる。

恋ひつつ＝××中×°×°（教29）　忍びつつ＝上コ××°×°（尾1上32ｄロ）

⑭　接続助詞ドモの類―已然形（I）に付いて、低接式〇〇型になる。

されども＝××中×°×°（教33）　言へども＝中××°×°（教24）　進めども＝上コア×°×°（尾4上232ｂ上音）

注

※　右記①類助詞の例において、「今は＝中上中（教135）」とあるのは、教育大学蔵譜本135頁の口説に「今は（中上中）」の如き表記が存する事を示す。本稿では教育大学本の譜記例を中心とするが、この資料では口説の例を専らとり上げた故、その頁数のみを示したわけである。同様にして、（尾5下338ｂ白）とあるのは、尾崎家本平家正節巻5下338頁の白声にその表記例がある事を示す。その頁数は大学堂書店からの複製刊本によるが、この本の一頁には原本の四頁分が収められる故、ここではその順序を示す為、右上・左上・右下・左下の順に、それぞれａ・ｂ・Ｃ・ｄと記した。「教」（教育大学本）や「白」（白声）その他の略称については前記第一一項を参照の事。

※　本稿の場合「用言」とは、主に動詞を意味するが、これは複雑化を避ける為の便宜的処置である。

※　例えば③類の助詞を《ノの類》としたが、これは、ノと同じ性格の助詞が他にもあるという事を、必ずしも意味しない。ここでは、先ず付属語アクセントの類型を求めようとするが故に《類》としただけの話である。

※　一拍名詞三類（山類）・二拍動詞一類（置ク類）等、自立語のアクセント分類についてはすべて、『国語学辞典』994頁の場合に準ずる。

※　なお、本稿で「山ノ類」と称するのは、「二拍名詞山類＋助詞ノの形」の意味である。その他もこれに準ずる。

三―一　助詞アクセント略説

以上、平曲譜本に反映した助詞のアクセントを具体例により示してきた。以下この問題に関する若干の考察を試みたい。そこにはいろんな検討が必要であるが、さし当り本稿では、それぞれのアクセント型の成立出自関係という様な面に重きをおいた。この場合、「中世初期」との比較をしばしば試みたが、これは、それ以前の付属語アクセントが必ずしも明らかでないという様な事情による。或は、この「中世初期」を一々、「中古～中世初期」の如く言い直すべきだったかもしれない。

①類―助詞ガ・デなどのアクセントは、中世期あたりから現代京都語までを通じて大差がない。「ひそかに＝平上平上°」（倶）などの卓立式は時代が降るにつれて少くなるが、特に、古

今訓点抄や四座講式あたりではかなり衰退していた模様である。この卓立式の衰退傾向は、①類助詞の場合に限らず極めて一般的な現象であるが、以下の記述では、必ずしもこれにふれない場合がある。

一方、平曲譜本の例外的な低接式は、現代京都語の例外現象「上(ウエ)に＝●●○、今日は＝○●○」などと関係するのか。平曲譜本の例外型は、他の助詞に下接する場合や用言接続の場合がめだつ様であるが、これも現代京都語の傾向性に似ている。勿論、現代語では、「取るのを＝○●○○」など、準体助詞ノを介して用言に連るわけであるが、やはり○型である。

尚、①類助詞の低接式が、他の助詞に下接する場合や用言接続形に著しいという事は、何らかの意味でその語性・職能に関係しそうである。つまり、或面ではそれぞれ、係助詞的性格や接続助詞的性格に通ずるものが認められそうなのである。例えば、承接順序において格助詞より下位にたつ係助詞が、一般に低接式をとり易い事など詳述するまでもなかろう。

②類―助詞ト（引用）・へなどの低接式は現代京都語も同様であるが、中世期以前においては或程度の変化が予想される。例えば『四座講式の研究』443頁では、ト・カ・ゾ（古くは清音形）が「すべて○型助詞になっているが、多少問題もある。古い例では平声表記が多い事勿論であるが、しかし、「～と及(シ)く＝上°上平」（観僧中52）・「あると＝××上°」（抄序）・「誰か＝上上上°」（前雄）・「止(ヤ)まぬか＝上上上上°」（抄774）・「事そ＝平平上°」（前継）・「いかにそ＝上平上上°」（高5ウ）の如き上声表記も或程度存する。

そう言えば、同書440頁では、②類のトを①類のトと別語源としているが、むしろ、これらを同一語源と見なし、《②類のトは普通、動詞の終止形（A）等に準ずる切れめを、その直前に予想すべきもの故、逸早く低下傾向を示した》と考えたい。また、係助詞カ・ソについてもそれぞれ、●型の指示詞「彼(カ)」「其(ソ)」と同一語源の如く見る説が有力である。尤もカの場合、現代京都語でも、「海か＝○○●」の如き発音がしばしば聞かれるが、そこにはアクセント以外の旋律的要素が含まれていそうである。カの上声表記古例についても、その辺の事情を或程度考え合わせるべきか。

モは、もともと◓型だったと言われるが、中世初期頃においては既に、「木芽(フ)も＝平平平上°」（寂9）の如き低平調接続例を除いて、概ね○型だった様である。而して、その例外的な○○●型も、南北朝頃以降は●○○型になっていたはずである。への○型も現代京都語と同様である。その古い姿は未詳であるが、「こしへ＝平平上°」（抄30）などの例からすれば、係助詞モに準ずる性格だったのか。名詞「辺(ヘ)」と同一語源なら●型出自という事になるが、何れにしても低下現象が起った事に変りはない。

平曲譜本において、②類助詞が従属式をとるという例外形は、他の助詞を下接させる場合に著しいわけであるが、これは、前記①類の例外現象を裏返しにした傾向性と言えようか。

③類―助詞ノのアクセントが、種々の面で①類の従属式助詞と異るのは、畢竟、《助詞ノの接尾辞的性格の故に、ノを含む文節全体が、単語の場合に準じて伝統的型式を保とうとした》

結果と考えられる。

現代京都語のノは概ね、その様な伝統的絆を断ち切っている為、従属式に近い性格である。「取るのは＝○●○○」等用言接続形に限り、徹底した低接式をとるが、これは《用言接続形では低接式になり易い》という前記（①類の項）傾向性を端的に示す訳である。

平曲譜本における例外型として、先ず山ノ類の●●○型は、その中世初期アクセント○○○型からの規則的変化型と見られるが、この場合、《単語山類がすべて○○→●○の変化を起して川類と合併したのに、山ノ類が、それと関係なく伝統的な●●○型を保った》のはやはり、文節山ノ類が単語に準ずる性格を有していた為と考えられる。唯、平曲譜本における山ノ類のアクセントとして、●●○型の他●●●型が多数存する点、やや問題であるが、つまりは、後続語との複合による平板化現象と見るべきか。助詞ノの非独立性は更に、ノの付いた文節全体の性格にも影響して、語と語の複合（例えば、「月＝●○」（教15）→「月影＝●●○○」（教15）など）にも準ずべき平板化現象を起したと見られるのである。

なお、現代京都語では、山ノ類・川ノ類ともに●●●型（●●○型でなく）が著しいが、平曲譜本では川ノ類がすべて●●○型をとり、山ノ類と峻別されている点、注目すべきであろう。

三拍名詞頭類（アクア）の●●○型と関係なく、頭ノ類が●●●○（or●●●●）型をとる事についても、山ノ類の場合とほぼ同様の事が言えそうである。

更には、手ノ類の●○型も、その中世初期アクセント○○型からの規則的変化型と見なされるが、これもやはり、《手ガ・手ヲの類が何れも○●型をとるのに、それら低起型の影響をうけず、伝統的な●○型を保っている》点、見逃せまい。手ノという文節全体が単語に準ずる性格をもっていた為であろう。現代京都語の場合、文節手ノ類は、手ガ・手ヲ等への類推的体系性により伝統的な絆を断ち切っている為、○●型をとるが、「絵の具・火の粉・木の子（茸）」の様な複合語形では、伝統的な●○型が或程度認められる。

一方、笠類（二拍語）（四類）においては、ガ・デ等①類の助詞が何れも高く付くのに対し、ノだけが低く付く点、現代京都語と異るがこれも結局、《笠ノという文節が単語的な性格を有していた為、笠ガ・笠ニなどの○●●型と関係なく、伝統的な○●○型を保った》ものと見なされる。なお、「権（ゴン）の＝中上中」の如き漢語形に限り、例外的に○●●型が存するが、これも四座講式時代の姿と一致する。

現代京都語の場合、笠ノ類は、笠ガ・笠ニの類への類推により、完全に○●●（or○○●）型となっているが、「数の子・後（アト）の祭り」等複合度の強い語形では、若干○●○型が認められる。

④類―助詞コソやダニの●○型も、かなり古くからの伝統型と見られる。例えば『四座講式の研究』444頁でも、ノミは●○型になっているのである。ただし、「まくのみ＝上上平上」（高47ウ）・「うきめのみ＝×上平平」（寂755）等の例からすれば、四座講式頃以前において或変化を想定すべきかもしれない。その語源についても、「之身（ノミ）（身は●型）」と見る様な説が存する。

コソやダニは同書では示されていないが、岩崎家本皇極紀の例「柔手(ニコテ)こそ＝上上平上°平」「米だに＝平平上°平」などからして、古くから●○型だったと考えられる。そう言えばダニは、その語源を副詞「タダニ」(タダは○◓型だったろう)と見た場合、●○(○or◓)型出自だった可能性が大きい。これに対しコソは、その語源を指示詞「此(コ)＋其(ソ)」と見た場合、むしろ●●型出自だった事になる。

なお、平曲譜本における卓立式表記は、ダニやノミよりもコソに著しい様であるが、これは、或意味でプロミネンス等にも通じるコソの強調的機能を反映するのか。現代京都語の場合、ダニやノミは殆んど用いないが、コソのアクセントはほぼ平曲譜本のそれに準ずる。

⑤類―助詞マデはもともと○●型だったらしいが、中世期には、「今まで＝平上平上?」(観僧中1)の様な卓立式から、「刈るまで＝上上平°平」(抄776)の如き従属式へ、漸次変化して行った様である。

これに対し、ヨリはもともと◓○型だったらしいが、「尻より口より＝平平上°平上上平°平」(観僧中135)の如き並存状態(●拍の後では○○型が多く、○拍の後では●○型が多い)を経て、漸次○○型に落ち着いて行った模様である。四座講式でも文明本以下の諸本では○○型が著しいという。

現代京都語を見ても、マデは概ね○○型であるが、ヨリは○○型の他、●○型の発音も時に認められる。平曲時代においても、事情はほぼ同様だったのか。

⑥類―助詞バカリは古くから●●○型を原則とした様であるが、一方、「いくばくばかり＝平上上上平°上°平」(観僧下101)・「見ゆばかり＝平平平°上°平」(抄378)の如き表記例も若干認められる。現代の京都語でも、程度の意のバカリは概ね●○○(↑●●○)型をとるが、限定の意では○●○型もかなり認められる。バッカリなど強調形の影響も或程度考えられそうであるが、それはそれとして、一おう古文献の例外型○●○を思い合わさしめる。或は、平曲譜本当時も同様の状態だったのか。

なお、バカリの語源が二類動詞「量(カ)ル」の名詞形であるならば、○○○型出自だった事になるが、その様な表記例は、「影ばかり＝平上平°平°」(抄764)の如きが僅かに認められるのみである。もう少し検討を要する。

⑦類―助詞ナンドは、その語源(何(ナニ)ト)からしても○●○型出自と考えられる。現代京都語ではその変化形ナドを余り用いないが、敢えて発音すれば○◓型となり、○●○型からの伝統性を思わせるものがある。

⑧類―禁止のナは古くから概ね、「出づな＝平上平°」(抄652)の如き低接式○型だったらしいが、これは、意味の面から考えて、動詞の命令形が常に低く終る事などとも関係しそうである。

⑨類―接続助詞テは、もともと完了辞「ツ」の連用形(E)として◓型出自だったらしい。而してこれは、かなり早い時期に概ね◓→●の変化を起したが、時代が降るにつれ○型の例も漸次増加してきたというわけである。

例えば平曲譜本では、取リテ類や受ケテ類に関し○●●～○●○のユレが注目されるが、これは訓点抄あたりから既に認められた所。更に、「給ひて＝平平上°上」(前仁)・「思ひて＝

平平上平。」（前仁）等、動キテ類や覚エテ類におけるユレは、書紀古写本あたりから見られるが、これらの場合は、何れにしても平曲譜本当時●○○○型に落ち着いている故、問題がない。一方来テ・見テの類は、平曲譜本ではまだ●●型をとるが、その後●●～●○のユレを起し、現代に至っている。

⑩類―接続助詞バも古くから大体、「着（キ）せば‖上上平。」（前雄）の様な低接式○型だったらしい。現代京都語では取レバの如き形を余り使わないが、もし用いればやはり○●○型をとる。ただ、その出自と見られる係助詞ハは●型のはずであり、未然形（概ね高音で終る形）接続のバが○型になるのはやや問題である。前記《体言に付いて従属式をとる助詞も用言接続形では低接式をとり易い》という傾向性等を考え合わすべきか。「留めてば。」（寂46）・「ごとならば。」（寂82）など、未然形接続のバが上声表記をとった例はその古い姿とも見なされる。

⑪類―否定の助詞デも古くから大てい、「寝で‖上平」（寂833）の如き低接式○型だった様であるが、その語源（ズ＋テ）などからすると、◒型 or ○●型（デの前に零表記のンを想定した場合）の如き出自かもしれない。

⑫類―接続助詞トモの低接式○○型もかなり古くから同様だったろう。その語源は②類の助詞ト＋モの形と考えられるが、動詞のA形に付く点等からしても、その低下傾向は一層著しかったはずなのである。

⑬類―接続助詞ツツのアクセントは、その語源（完了辞ツの重複）からみて、もとは◓●の如き型だったと思われる。この型は指定辞ナリの終止形などにも認められるものであるが、そう言えばツツのアクセント表記古例も、「転（マ）ひつつ‖上平上。」（前仁）・「しつつ‖上平平。」（抄347）・「待たれつつ‖平平上平。」（抄772）の如く、かなり複雑であり、ナリのアクセント（『四座講式の研究』466頁）を思い合わさしめるものがある。更に、それが平曲譜本頃までの間に低接式化した点もやはりナリの場合と同様である。現代ではツツを殆んど用いないが、敢えて発音してみると一おう低接式になる。

⑭類―接続助詞ドモのアクセントも相当古くから、「隠せども‖平平上平。」（抄885）の如き低接式○○型だったらしい。尤も、ドモの付く已然形（I）は常に低く終るはず故、右の事実から直ちに○○型出自と見る事はできない。その語源からして、一おう⑫類のトモに準ずる性格と考えられるのである。

四　助動詞のアクセント

助動詞については紙数のつごう上、主要語アクセントに関する考察の結果だけを略記する事とし、その考察手順や具体的な資料などはすべて別の機会に譲る。

なお、助動詞アクセントの分類手続きその他は、概ね前記助詞のそれに準ずる。助動詞の場合は、特に活用形の問題が難しいが、ここでは終止形（A）を中心とし、その他の活用形をもあわせ考える事とした。アクセントから見た助動詞の活用形分類A形～M形については、すべて動詞の場合（下記第六項）に準ずる。少くとも⑦類や⑱類の助動詞については、どうしてもこの様な立場が必要なわけである。

(イ) 体言接続助動詞

① 指定法ナリ・タリの類―低接式○○型。ただし、ベシ・マホシなどを下接させる場合は、例外的に従属式●●型をとる。なお、ナリが用言（終止形又は連体形）にも下接し得る点でタリと異る事など、言を要するまい。

(ロ) 用言接続一拍助動詞

② 過去・完了法キ・ツ・ヌの類―連用形（E）に付いて低接式○（○or○）型をとる。ただし、ベシなどが下接する場合は例外的な●型。

③ 過去法シの類―連用形（F）に付いて従属式●（○or●）型をとる。

④ 完了法リの類―已然形（I）に付いて低接式○型をとる。

⑤ 否定法ズの類―未然形（K）に付いて低接式○型をとる。

⑥ 未来法ムや否定法ヌの類―未然形（L）に付いて従属式●型をとる。

⑦ 使役法スや受身法ルの類―未然形（L）に付く。ただし、そのB・C・D・G・H・I・L・Mなど諸形は動詞の未然形（M）に付くとも見なされる。アクセント型もその活用形によって異るが、原則的には下二段活用動詞の語尾に準ずる。つまり、一・三類動詞に付く時は概ね従属式●型（ただしD形は●●型、I形は●○型）E形・F形・J形は低接式○（○or○）型。二類動詞に付く時は概ね低接式○（○or○）型、ただし、B形・C形・H形・M形は従属式●型。

⑧ 未来否定法ジの類―未然形（L）に付いて低接式○型をとる。

(ハ) 用言接続二拍（以上の）助動詞

⑨ 推量法ラムの類―終止形（A）に付いて低接式○○型をとる。

⑩ 推量法ベシの類―終止形（B）に付く。概ね低接式○○型であるが、一・三類動詞に付く時は従属式の例もある。理くつから言うと、その文節全体がク活用形容詞のアクセントに準ずるはずであるが、実際問題としては、いろいろ違った点が認められる。尚、連用形ベクはむしろ動詞のC形に付くとも見られるが、或は⑫類ベカリの連用形と考えるべきか。

⑪ 未来否定辞マジの類―終止形（B）に付く。原則的には、その文節全体がシク活用形容詞のアクセントに準ずる。つまり、一・三類（及び一拍二類）動詞に付く時は大てい従属式。二類動詞に付く時は低接式が普通であるが、連体形等では従属式の例もある。

⑫ ベカリの類―終止形（C）に付く。原則的にはその文節全体がカリ活用形容詞のアクセントに準ずる。つまり、一・三類（及び一拍二類）動詞に付く時は大てい従属式●○○型。二類動詞に付く時は概ね低接式であるが、若干例外もある。

⑬ 完了法タリの類―連用形（E）に付いて低接式○○型となる。例外として、二拍二類動詞の促音便（稀に他の音便も）形に付く時など、●○型に変容する事もある。

⑭ 過去法ケリ・過去推量法ケムの類―連用形（E）に付いて●○型をとる。下降調のあとでは、従属式○○型と卓立式●○型との両者が見られるが、卓立式はケリに著しい様である。

⑮ 希求法タシの類―連用形（H）に付く。（ただし、連用形タクは動詞のF形に付き、⑯類タカリの一活用形とも見るべき

面がある。）原則的にはその文節全体がク活用形容詞のアクセントに準ずる。つまり、一・三類（及び一拍二類）動詞に付く時は概ね従属式●○（or●○○）型。二類動詞に付く時は低接式を普通とするが例外も若干ある。

⑯ タカリ類―連用形（F）に付く。原則的にはその文節全体がカリ活用形容詞のアクセントに準ずる。つまり、一・三類（及び一拍二類）動詞に付く時は大てい従属式●○○型。二類動詞に付く時は概ね低接式をとるが、例外も若干ある。

⑰ 否定法ザリの類―未然形（K）に付いて低接式○○型をとる。

⑱ 使役法サスや受身法ラルの類―未然形（M）に付く。一・三類動詞に付く時は、概ね下二段活用動詞の語尾に準じて、《●○（A形・E形・F形・J形）、●●（B形・C形・H形・K形・L形・M形）、●●●（D形）、●●○（I形）》の如き従属式をとる。二類動詞に付く時は、《●○（B形・C形・H形・L形・M形）、●○○（D形・I形）》の如き従属式と、低接式○○型（A形・E形・F形・J形・K形）との両者が認められる。

⑲ 希求法マホシの類―未然形（M）に付き、各活用形とも概ね従属式になる。原則的には、その文節全体がシク活用形容詞のアクセントに準ずる。

五　結び―付属語アクセント型式の伝統性

以上、平曲譜本に反映した付属語アクセントについて略述したが、ごく巨視的には、《四座講式などのそれとの間にかなり厳密な対応関係を保つている》と言えよう。そこに認められる変化もその多くは、付属語アクセント自体の変化というよりむしろ、先行自立語のアクセント変化にひきずられたと見るべき場合が多い。

ここで敢えて、付属語アクセント変化の現象をうかがうならば、一おう、《(い)卓立式の衰退、(ろ)従属式の低接式化》の二面からとらえられようか。その(ろ)については従来余り説かれなかった所であるが、付属語アクセント変化の一般的傾向として興味深い。

助詞について言えば、前述の如く、⑧類のナなど、一おう低接式出自と見られるものもあるが、その多くは何らかの意味での低下傾向が認められそうである。勿論、助詞アクセントの低下傾向と言っても、その様相は、例えば下記(I)～(Ⅳ)の如く様々であるが、ともあれ注目すべき事実と言えよう。

(I)　②類モや⑤類ヨリ・⑬類ツツの如く、かなり早く◓→○の変化を起したらしいもの

(II)　⑨類テの如く、◓→●の変化を起した後、従属式・低接式の並存状態を示すもの

(III)　①類ガ・ニ等の如く、或特定条件のもとで若干低下傾向を示すもの

(Ⅳ)　③類ノの如く、一時的に低下傾向を起したもの、等々。助動詞の場合も事情はほぼ同様であり、例えば、②類のツ・ヌや、③類のシ・①類のナリなど何れも、◓→○の変化が想定される。

更に言うならば、●●○●→●●○○（翼を・勝れり等）の如き卓立式の従属式化傾向も、或意味での低下現象と見られぬ事もない。

五―一　付属語アクセントとその語性

最後に、《付属語アクセントとその語性・職能との関係》につき一言しておこう。

(I)　例えば、低接式アクセントの付属語は、前述の如く一般に、《承接順序において下位にたつものや、用言に付くものが多い》様であるが、これは或意味において、その語性職能を反映しているのであろう。曰く《従属式の付属語は概ね、低接式のものより独立性が弱く、接尾辞に近い性格をもつ》

そう言えば、《ス・ル・サス・ラル・タシ・マホシの如き接尾辞的な助動詞はそれぞれ、動詞のL形・M形・H形など、概ね語尾の高く終る活用形に付いて、従属式アクセントとなる》が、これは当然、承接順序において上位にたつというそれらの語性と関係する。そもそも、承接順序において上位にたつ付属語が低接式アクセントをとると、その下位にくる付属語の接続が不便である故、どうしても従属式になり易いはずである。而して、上位にたつ付属語に接尾辞的性格が著しい事など、既に説かれている所なのである。

(II)　更に言うならば、付属語は一般に従属式→低接式の傾向性が著しい事、前述（第五項）の如くであるが、これも或程度、《文末（或は句末）にたち易いという付属語の語性》が反映しているのであろうか。

(III)　一方、卓立式について言えば、同じ●○型の助詞でも、コソはノミ等より卓立式が著しい様であるが、この現象もやはり、前述（第三―一項④類）の如く、その職能的意味・語性というような面に関係しそうである。

(IV)　また個別的な現象として、連体格助詞ノのアクセントが、いろんな点で①類の従属式と異るのも、その語性（つまり助詞ノの接尾辞的性格）の反映と見なされる事、前述（第三―一項③類）の通りである。

所で、かかる《付属語アクセントとその語性・職能との相関性》は、多かれ少なかれ常に認められるはずであるが、一般的には、時代が降るにつれて著しくなってくる様である。つまり、時と共に漸次、各付属語固有のアクセントに関する伝統性が失われ、語性・職能その他が、或程度アクセント型を制約する様になってきたと考えられる。

因みに、自立語の場合でも、例えば、現代京都語における《「三度（サンド）」の名詞的アクセント○●○型（三度の食事）と、副詞的アクセント○○●型（三度行く）との対立》など、その語性・職能がアクセント型を制約する例は認められるが、付属語の場合ほど著しくはない。そこでは、伝統的型式の規範性が付属語の場合より著しい様であるし、又、基本型（原則としてその語の拍数等に支配される）という様な要因も参加してくるわけである。

六―(付)　動詞のアクセント活用表

左の表は、平曲譜本に反映した動詞のアクセントからして、その活用形の整理を試みたもの。詳細については『文学研究』72集の拙稿を参照されたい。

語類	語例	アクセント式活用	文法式活用	終止形		連体形	連用形						已然形	命令形	未然形		
				及び四段式・一段式の連体形		（前記以外）											
				A形	B形	C形	D形	E形	F形	G形	H形	I形	J形	K形	L形	M形
一拍語 一類	為（ス）			終止形の大部分及び連体形一部	ベシ・マジ等の付く形	ベカリ・マジカリ等の付く形	二段式及び変格式の連体形	連用形の大部分	シ等の付く形	名詞形	タシ等の付く形	いわゆる已然形の全部	いわゆる命令形の全部	ズ・バ等の付く形	ス・ル・ム・ヌ等の付く形	サス・ラル・マホシ等の付く形
一拍語 二類	来（ク）			●	●	○	○●	●	○	○	●	○●	●○	●	○	●
二拍一段式 一類	着ル（キ）			●●	●●	●●		●●	●	●	●	●○	●○	●	●	●
二拍一段式 二類	見ル			○●	●●	●○		●	○	○	●	○●	●○	●	○	●
二拍四段式 一類	置ク			●●	●●	●●		●○	●●	●●	●●	●○	●○	●	●	●●
二拍四段式 二類	取ル			○●	●●	●○		○●	●○	●○	●●	○●	○●	○	●○	●●
二拍二段式 一類	捨ツ			●●	●●	●●	●●●	●○	●●	●●	●●	●○	●○○	●	●	●●
二拍二段式 二類	受ク			○●	●●	●○	●○○	○●	●○	●○	●●	○●○	○●○	○●	●○	●●
三拍四段式 一類	渡ル			●●●	●●●	●●●		●●○	●●○	●●○	●●●	●●○	●●○	●	●	●●●
三拍四段式 二類	動ク			●○○	●●●	●●●		●○○	●●○	●●○	●●●	●○○	●○○	●○○	●●	●●●
三拍四段式 三類	歩ク			○●●	○●●	○●●		○●○	○●	○●	○●●	○●	○●	○●	○●	○●●
三拍一段式 一類	重ヌ（カサ）			●●●	●●●	●●●	●●●●	●●○	●●○	●●○	●●●	●●○	●●○	●●	●●	●●●
三拍一段式 二類	覚ユ（オボ）			●○○	●●●	●●●	●●○○	●○○	●○○	●○○	●●●	●○○	●○○	●○○	●○	●●●

本稿は昭和四十九年度文部省科学研究費による「平曲譜本の国語学的研究」の一部をなす。